

第7回 NAMMビジネスツアー —— 米国現地企業2社をMMAスタッフと共に訪問 ——



NAMM Tour Photo Contest 応募作品



“ユニークな広告塔” 応募者：木下 勝次様 (株)コルグ



“ユニークなギター” 応募者：山下 大様 (株)サミーネットワークス

第7回目を迎えた当AMEI主催のNAMMビジネスツアーは平成16年1月14日に東京を出発して、丸4日間現地アナハイムに滞在し、従来とほぼ同様会員15名の参加を得て、NAMMショーを視察後、20日に無事帰国しました。今回のツアーでは初めての企画として現地到着当日に米国現地企業2社を訪問し、NAMMショーとは趣の異なる経験をしました。

CONTENTS

- 第7回 NAMMビジネスツアー1
- Winter NAMM 2004 視察レポート2・3・4
- MIDI検定試験レポート5
- MIDI検定2級資格保持者の現在と将来を語る6・7
- AMEI会員名簿とお知らせ8

AMEI NEWS Vol.23 / 2004.4.7

社団法人音楽電子事業協会 機関誌

発行：社団法人音楽電子事業協会 事務局

〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-16-9

イトービル4F

TEL.03-5226-8550 FAX.03-5226-8549

発行人：中田 健

編集人：福田 誠 (広報委員会)

編集協力：株式会社 博秀工芸

ホームページアドレス：<http://www.amei.or.jp/>

本ツアー参加者からご記入戴いたアンケートについては誌面の関係で別途AMEI HOME PAGE等でご案内する予定です。

Winter NAMM 2004 視察レポート



MMA/AMEI合同会議に続く合同夕食会

1. MIDI規格委員会 足立 雅人（株式会社 コルグ）

2004年1月15日から18日まで、Mobile DLS WGリーダー代行として、アナハイムで開催されたNAMM2004を視察しました。

NAMM全体印象ですが、アコースティックギター関連の展示が多いことがまず一番に目に付きました。他のアコースティック楽器関連も展示数が増えているようです。

電子楽器関連では展示製品の完成度の高さが印象に残りました。開発途上と思われるような展示の比率が低いし、すぐに触れてすぐに楽しめるコンセプトの分かり易さを訴求した製品の比率がますます高くなったように思います。逆に、じっくり弾き込む／使い込む、使いこなすには力量と時間が必要といった製品の比率が低いようです。ハードウェアのGroove機器やアレンジ・ハーモナイズ機能付き機器の露出が控えめなのは、世界市場の動向なのか、米市場の動向だけを反映しているのかが不明でした。

中国・台湾企業の展示が少なかったようです。music CHINAが開かれるようになった影響や、OEMという形で表に目立たない形で浸透しはじめたこと、中国国内の市場だけでビジネスが成り立つようになった分野があること、などが考えられます。

ソフト製品やニッチ製品に代表される小規模の新興企業の展示が少なかったようです。ネットを中心としたプロモーションや販売の手法・経路が確立した影響や、逆に楽器機能が高度化し、新参では簡単に参入しにくくなっていることが考えられます。

有線ネットワークの動向に変化が見られたように思いました。従来のMIDI端子はなく、USB 1.1でMIDI/Audioを担当させる製品が増えました。一方、Multi Channel Audio対

応製品ではUSB 2.0対応よりFIREWIRE対応製品が増えました。

今年のAMEIツアーでは、MMAの協力によってNAMM前日にJL Cooper社とSoundelux社の訪問見学が企画されました。今後も意義のある企画であり、可能な限り継続してはどうかと思います。

今回のようなハリウッド関連のコンテンツ開発企業に加えて、ソフト製品開発企業の訪問を加えたり、事前に訪問先企業名を発表することで、AMEIツアーの活性化につながる可能性があると思いました。AMEI非会員企業や非AMEIツアー参加者の同行も検討出来そうです。

JL Cooper社はミキサーや業務用オーディオスイッチなどを得意とする専門メーカーのようです。得意なアナログ技術にフォーカスした製品が揃っています。得意技術に絞った経営で、有力な競合企業も見当たらない為、収益はずっと堅調とのこと。社内に既にある技術の使い回し・展開が上手な企業だと思いました。

Soundelux社は、映画・ゲームの効果音のポストプロダクションが得意なスタジオで、日本流に言えば「音効さん」です。これまでに有名タイトルを多数担当しており、社内に貼られたポスターにも著名な作品が多数見られます。

スタジオ規模に比べてハードウェアが少ないことが目に付きます。Protoolsがメインツールで、最近ではほとんどの音源・エフェクトにプラグインソフトを利用するようになったそうです。この業務でもっとも大切なことは、時間内にサウンドを仕上げることであり、音作りの為のセッティングもまるごと記憶出来て、例えば、後で映像が変更

になって音を修正する必要が生じて、すぐにリコールして作業を再開してやり直せるのが魅力だそうです。

16日にはJoint AMEI/MMA Leadership Meeting、18日午前にはMMA 総会、午後は2部屋に分かれ5つのセッションが並行で開催され、参加しました。

Joint Meetingでは、MMAの各WGの活動が紹介され、内容や方向性、AMEIとの連携について話し合いました。対応するAMEI側の進捗を報告すると共に今後の活動について協議しました。特に、AMEI側にはGMPI(Generalized Music Plug-Ins)、MIDI Over Alternate Media Transports、3D Controllersに対応する活動主体が無く、今後連携方針を示す必要があります。

今回のMMA総会では懸案のMobile DLS & Mobile XMFの投票が行なわれ、滞りなく可決されました。SMWG (Scalable MIDI Working Group) と今後の3GPP向け提案活

動についての日程調整を行ないました。また、MMAではAuthoring Guidelineの作成を予定していることが明らかになりました。

前後しますが、MMA総会ではAMEI平野技術担当部長よりAMEIの組織と活動についてプレゼンテーションする時間枠が割かれており、MMA会員のAMEIに対する理解を深めることに一役買ったことと思います。特に、MIDI検定の下りには興味津々のようで、「規格策定→検定・ライセンス付与→業務に活用→業界の発展」のサイクルを成立させていることにある種の驚きを与えたものと思います。

最後に、AMEI平野さん、中田さんのご尽力により、快適かつ有意義なツアーとなったことに感謝を申し上げます。どうもありがとうございました。

2. AMEIグループツアーに参加して Koichi Sanchez (Trainer/Merchandiser, Yamaha Corp.of America) 抄訳：平野

この度AMEIから依頼を受けプロ音響業界の2社を訪問する機会がありました。

去る1月14日、LAの空港ロビーでAMEI一行と会い、米国現地の旅行社の稲田さんというガイドと共に予想もしない50余人乗りの大型バスでの会社見学ツアーに参加致しました。

● JL Cooper Electronics

最初訪問したJL Cooper社について簡単にその背景をご紹介します。同社は10年以上前からJL Cooper Electronicsとしてプロ用のMIDI機器の開発・販売とOEM業務をしています。一連のミキサーを初めとして同期関連機器、MIDIやオーディオ・ビデオ・マルチメディアのジャンルでのコンピューター関連機器を得意としている会社です。商品は全世界の市場に広く販売されています。

会社はロス空港のすぐ南の町にあり、単独のコンパクトな建屋の中で開発・設計・販売のみならず、自社内で完成品の組み立て・出荷まで全て行っています。

ここで、ヤマハのAthan Billias氏も加わり、JL Cooper社のChuck Thompsonの案内で同社を見学しました。

受付ホールで簡単に自己紹介をしたあと、2階のショールームに案内され、同社の主要製品の中でもポピュラーなモデルを紹介されました。この中には、Digidesign社のPro-



JL Cooper社にて

Toolsと類似機能の32チャンネルのモデル等が整然と並べられていました。

AMEIのスタッフもこれらを見て非常に驚いたようでした。更にChuck/T氏は、同社の製品はマルチメディア分野のみならず医療用のカメラやリモコン、水道管の機密性のテスト等にも利用されているとも話された。

同社の競合相手の有無についてのAMEIスタッフから質問に対しては“いえ、有りません”と即座に返事が返ってきました。

又次期商品企画についての質問に対しては、現在はMac OSX、Win XPへの対応を準備中であるとの説明があった。

このJL Cooper社はこの分野での第1人者であり、教育関連のOEM業務等の分野にも進出しているということです。

その後同社の倉庫と製品組み立ての現場に案内されました。製品のメイン基盤は外部加工先から受け入れ、最終組み立てと出荷作業、材料倉庫等の一連の機能を自社内で済ませています。



Chuck Thompson



Soundelux社スタジオにて

見学を終えて、正面玄関前で記念写真を撮り、案内してくれたChuck/T氏に礼をいって次の目的地のHollywoodに向かいました。

● Soundelux in Hollywood

2番目の訪問先であるHollywoodのSoundelux社に移動しました。Athanさんは同社のNAMM準備のために会場へもどり、代わってMMAのTom White氏が加わっての見学となりました。

当初同社のスタッフと昼食を共にする予定でしたが、同社の案内を依頼したScott M Garshin氏自身の業務が立て込んでいるとの事で、我々だけで同社のビルの1階のバーで軽昼食をとりアポイントの時間を待ちました。

同社Soundelux社は恐らくポストプロダクション分野では業界トップにランクされている会社で1982年にスタートして以来同業界では、映画制作会社との密接な関係の中で当初の方針を貫いて成功している特異な会社です。大切な点は、ポストプロ業界では最新設備のスタジオと機材を持つことよりも、その映画の中で“音”が果たす役割を正しく理解して作品をまとめる事だとされています。

同社の役目は、3つ、音の編集、音のまとめ、音作りです。

彼、Scott Gershin氏をロビーで待つ間にロビーを見回すと、色々興味ある発見をしました。過去の有名ないくつかの映画のポスターは同社スタッフへの謝礼の言葉と登場スターの署名入りで幾つか展示されていました。

間もなくアポイントしたScott Gershin氏のご登場となりました。

始めに我々訪問チームの簡単な紹介の後、彼Scott氏は自分の仕事の内容について説明を始めました。

彼が同社の一人のSound Engineerであり、部屋の機材は、大小、高価な機材から安い玩具の類いまで実に多くの機材が所狭しと並んでいました。彼は自分自身を、“音楽の定義は雑音をうまく使い分け、自分自身はオーディオの物語作家である”と表現していました。

更に彼はAVID社のコンサルタントでもあり、色々なプロジェクトを通して多くの受賞をしています。それらは、Academy, Emmy, British Academy, TEC, Golden Reel等々があり、又パークリー音楽院のThe Famed Alumni Awardも受賞していることを知りました。

現在Scott自身はユニバーサル映画の“Chronicles of Riddick”とその3部作の仕事で音響デザインとビデオゲームと一連のアニメ制作に掛かっているということです。彼

からは素晴らしい音制作の秘技の例を幾つか紹介してもらいましたが、私の個人的視点では種々の音に加えて彼個人の音声を活用している点に興味をわきました。彼Scottの説明でも人声と口が何にも増して世界一素晴らしいフィルターだと言っていました。私も全く同感です。

ところで彼のスタジオのセットアップについても興味があるでしょう。Tom WhiteがJBLの5.1サラウンドの中央部に立っています。その前には大型の映画スクリーンがあります。

Pro-tool 24 Mix TDMに取り囲まれて彼のメインデスクが配置されています。更にラックは殆どエフェクターとプリアンプで埋め尽くされ、やや離れて昔のアナログシンセも並んでいます。

映画の音は44.1kHz/16ビット或いは44.1kHz/24ビットで制作されているのが現状であり映画館は24/96或いは更にその上にシフトしつつあるようですが諸般の状況でScott自身現在はPro Tools HDにアップグレードしていないとの由。更に興味深い点は恐らく彼はNuendo 2.0への切り替えを狙っているのか？というのが私の個人的な想像です。

この彼の予測は明快ですが、Digidesignの市場独占は主としてそのハードに依存していることだと思います。何故ならば、仮に彼らがHDやHD Accelに切り替えれば、その経費は決して少ない訳がないのだから。

私の個人的な意見ですが、このようなアプローチはプロオーディオではよくあるケースであり、近い将来にはそうなるであろうと思われます。更に彼は製造側はポストプロの人間の意見を聞くべきでないが、然し代わりにポストプロ側は実際何が必要でどのような仕様が必要なのかを開発側に正しく伝えるべきだとも言うていました。

彼にお礼をいって部屋を出る前に、今進めているテーマの音を聞かせて欲しいと申し出たのですが、残念ながら著作権問題があるとのことで断られました。

私を含めて彼の説明を聞いた皆さんから彼に礼をいって退室しました。

以上で予定した2社の訪問を終えました。

今回の訪問では今までにない吃驚するような経験をさせてもらい大変感謝しています。

AMEIの皆さんにまた近い将来再びお会いできることを期待しています。

どうも有難う御座いました。



機材の前で説明するScott M. GershinとMMAのTom White 両氏